

東条一堂『四十四音論』及び 岡本保孝『四十四音論弁誤』について

田中 草大

一、当稿の趣旨と目的

東京大学国語研究室では、国学者の家系であった黒川家（春村・真頼・真道）旧蔵書である黒川文庫の、「言語」部と「辞書」部の大部分を第二次大戦後に一誠堂書店から購入して所蔵しており、うち「辞書」部については、二〇〇九年度より同研究室所属の大学院生により書誌調査が進められている（註一）。

「辞書」部は、『色葉字類抄』や『節用集』のような所謂辞書に限らず、『韻鏡』に代表される韻書、また往来物、国書など、幅広い体裁と内容を持つ写本・刊本から成り、それらは右に挙げたような国語学史上よく知られたものから、今まで学界に紹介されたことのないものまで、多種多

様と言える。

ここに取り上げる「四十四音論」という外題を持つ江戸時代末期の写本は後者に属するものであつて、『国書総目録』によると、当研究室が蔵するものが唯一である。『四十四音論』は、後に述べるように、国語音韻はもとも四十四音（いろは四十七字のうち、イ、ヤ、ヲ、エ、の重複を一括した数）から成ると論じたもので、この主張自体が直接に現在の日本語研究に資しないことは言を俟たないが、その反論書である『四十四音論弁誤』の記述には、国語学史上、注目される点も存する。

また、黒川文庫「辞書」部に含まれる和書を取り上げて、それがどのような性質を持つものであるかを調査して示すことは、進行中である書誌調査事業の一環としても意味のあることと考えて、ここに公表する次第である。

二、資料についての基本情報

この本について『東京大学文学部国語研究室所蔵 古写本・古刊本目録』は、書名を外題に拠って単に『四十四音論』とする(三十四頁)が、実際の構成は『四十四音論』(以下『論』)とそれを難する『四十四音論弁誤』(『弁誤』)との合冊である。墨付き十一丁半のうち、前三丁が『論』、それ以降が『弁誤』となっている。

またその著者については、『国書総目録』は『論』『弁誤』共に、幕末明治期の国学者である岡本保孝としているが、『論』と『弁誤』とは、題からも明らかのように、後者が前者の主張を論難するという関係にあるため、両者が同一人物により著された筈がない。事実、『論』巻末に「湯臺游民 東條弘撰」とあるので、江戸末期の儒学者である東条一堂(弘は諱)による『論』を、同時代人たる保孝が『弁誤』で批判したという形と考えるべきである。^註こ。『弁誤』については、巻首に「岡本保孝著」とあり、また跋文に「文政五年秋八月 岡本保孝稿」ともあつて、こちらは保孝の著作であると確認できる。

ここで著者について概観しておく。東条一堂(一七七八

一八五七)は、上総の生れ、幼少のころ江戸に出て、亀田鵬斎の塾に学び、その後京へ遊学して皆川淇園にも師事した。二十七歳の頃、弘前藩藩校の督学となったが、後江戸に戻り、駒込・湯島・玉池に塾を構えた。朱子学を強く批判し、焚書以上学を高唱した。その名声は高く、福山藩主阿部正弘の招聘を受けるなどしている。

岡本保孝(一七九七一八七八)は、江戸の根津三浦坂に生れ、二十一歳のころ清水浜臣の、三十二歳のころ狩谷掖斎の門に入った。幕府に仕えながら、文字・音韻・文学・国史など、考証学を中心に多くの論考を著した。また、明治に入つては弟子の木村正辞と国語辞書『語彙』の編纂に携わった。(以上、それぞれ鶴田恵吉(一九五三)、榎一雄(一九七七、八)に主に拠っている)

さて、続いて所蔵状況を見る。『国書総目録』によると『論』は東大国語研究室の蔵する一冊のみである一方で、『弁誤』については「静嘉(岡本況齋雜著一八)」と記し、静嘉堂文庫蔵『岡本況齋雜著』に収めることが判るが、東大本については記述が無い。要するに『論』は東京大学にしかなく、『弁誤』は静嘉堂文庫にしかないということになるが、実際には、既に述べた如く東大本は内に『弁誤』を含むものであり、また原本を調査した結果、静嘉堂本も冒頭に『論』を配することが判明したので、東大本『四十四音論』と静

嘉堂本『四十四音論弁誤』とは、いずれも『論』と『弁誤』との合冊本ということになる（但し、特に『弁誤』については、両者間で本文の細部に異なりがある。後述）。

加えて、『論』は東京大学総合図書館の蔵する「鴎外文庫」の収める写本『一堂文藁』（書写年不明）にも収められている（第十八丁裏～二十丁表）。これは『弁誤』を収めない。

注記や例示に東大本・静嘉堂本と一部異なりが存するが、鴎田（一九五三）に翻字が掲載されており（一九三～一九五頁）、この二本との異同は、本稿後掲の翻字と鴎田氏の翻字との比較によって確認できる。なお、この『一堂文藁』も、『国書総目録』及び鴎田（一九五三）によれば東大蔵本が現存唯一である。

三、東大本の書誌情報

黒川文庫の第十八「辞書」部の一冊である。弘化二年（一八四五）写、二巻一冊、墨付き十一丁半。縦二十四・七×横十六・四糎で、少し大きいがほぼ半紙本サイズである。表紙は薄花色。外題は左題簽（双边）に「四十四音論」とのみ。また右上には「辞書」印（黒川文庫の分類印）が捺してあり、朱筆で「岡本保孝著」と書かれている。内題（巻首題）は、「四十四音論」（第一丁表）及び「四十四音論辨

誤」（第四丁表）。蔵書印は、東大関連のものを除くと、第一丁表に「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」。書写與書は「弘化二乙巳春正月会二日／即日書写畢（花押）」。その他、『弁誤』については跋文に「文政五年秋八月 岡本保孝稿」（第十一丁裏）とある。

【成立年・書写年】

『論』については「湯臺游民 東條弘撰」（第三丁裏）とのみあつて具体的な著述年は不明であるが、鴎田（一九五三）によると一堂が湯島台に塾を構えたのは文化十三年（一八一六）から文政四年（一八二一）の足掛け六年間なので、これが著されたのもこの期間と見てよい（一堂は上総の生れなので、「湯臺游民」の「湯臺」は生地を指すものではない）。一堂が三十九歳から四十四歳の頃となる。『弁誤』は、先述の通り文政五年（一八二二）の跋文があつて、本文が著されたのも同年と見るのがまず自然であろう。これは一堂が湯島を離れた（則ち「湯臺游民」ではなくなった）翌年であり、時期的にはちょうど隣接する。保孝は二十六歳であり、榎（一九七七、八）によると上野に居を構える清水浜臣の門下に入つて五年目、また湯島の狩谷掖斎に師事して三年目という頃である（註三）。既に著述は始めていた（註四）。

東大本書写年の弘化二年はその二十三年後となる。

【書写者】

『論』と『弁誤』は同筆の書写と見て良い。先に掲げた書写奥書からは書写者は判らない。ただ、書写年の弘化二年には保孝は健在であるが（四十九歳）、誤字・脱字・衍字・濁点の打ち誤り・句読点の打ち誤り・傍線の引き誤り等の誤写が散見され、保孝自身が写し直したものととは到底思われない。

弟子が写したものであろうか。保孝の弟子として有名なのは木村正辞（一八二七—一九一三）である。しかし、彼は保孝より前に伊能穎則に師事したのだが、それが木村本人の回想に拠れば「おのれ正辞またはたちあまり三つ四つばかりのほどにやありけむ」（榎前掲論文、一五三頁）というから、弘化二年には木村は数え年で十九歳なので合わない。それに、右に記した如く、文章がよく判った人間が写したにしては杜撰な誤りが多い。結局のところ書写者は全く不明である。ただ、書写者が記されていないことから、初学者が自分のための当座用のノートとして書写したものでなかろうか。

ただ、伝来ということでは、岡本保孝が師事した清水浜臣と狩谷掖斎、この両名に国学を習った者の一人がちやうど黒川春村であり、岡本保孝↓黒川春村という直接の受け渡しではないにせよ（特に起点が保孝であるということとは、

先述の理由から、考えにくい）、この筋から当資料が黒川家に伝わったということは充分考えられるように思う。

なお、東大本の書誌情報については藤本灯・平井吾門・竹入優（二〇一〇）の書式に則ったものを後掲する。

四. 本文の要旨

（一）『論』は、漢文体で、ルビを除き仮名は無い。候文の類ではなく、正格漢文を志したものである。

その主旨は、日本語の音は「天地間自然之音」である四十四音のみだということである。四十四は、いろは四十七字から、イ・キ・ヲ・オ・エを音の重複として一括した結果の数である。いろは歌のキオエ三字は、歌の体を為すには四十四では足りないのでイヲエの同音異体字が加えられたのである。それより後に作られた（と述べられている）五十音図についても同様で、こちらは喉音のヤ行・ワ行中の不足（ヤ行のイ・エ段及びワ行のイ・ウ・エ・オ段）を、同じ喉音であるア行から採り補ったのだとして、オ・ヲなどに「開合之別」があるという説を否定する。

根拠としては、国語音を考える上で中国語の特徴である四声などは問題としないのに、開合のこのみ言挙げして区別を見出そうとするのは無根拠であることや、記紀に見

える兄弟、億計王・弘計王は丹波国に隠れ暮らしした時にどちらも丹波小子と称したのだから、億計・弘計も同称と見て自然である、などと述べられている。

(二)『弁誤』は、片仮名漢字交り文。但し跋文では平仮名が用いられている(東大本では片仮名も交る)。

冒頭から「終篇僻説ニシテ一言半句ノ採用フヘキモノナシ」と述べる如く、全編は『論』の論難に終始する。具体的には、「以呂波四十七字之未出也^止而成章者也」といった形で『論』本文を十二に分割し抜書きして示した上で『論』の書出しは「以呂波四十七字之未出也、我邦之音、有四十四而已、以呂波也者、和歌之長篇、七言与五言、遞而成章者也」。「止」は中略を示すらしい、それについて逐一反論を加えてゆくという体裁を取る。

反論の根拠としては、古書(「天曆以前ヲ云フ」(第四丁表))を見てもオ・ヲ等の区別ははっきりしており、とても両者の違いは字体のみとは考えられないこと、いろは歌のオオエが一堂の言うように歌の形を為すための追加に過ぎないとしたら、いろは歌が歌の形として不完全である(「わかよたれそ」は一音足りない、テニハに正用でないところがある等)ことが却って不自然である、また五十音図でヤ行のイ・エ、ワ行のウについてはア行との字体の違いを設けていないことをどう説明するのか、などを挙げ、四十七

音こそが「天地間ノ自然ノ音」であって、イ・オ・エ・ウはかつての発音の違いを反映したものであることを主張する。

五.『弁誤』の論拠と保孝の思想

『弁誤』の主張の傍証となっているのは、本居宣長、文雄、村田春海、太田全斎といった国学者の説である。特に太田全斎と村田春海の説を承けた所が目立つ。字音については全斎の説に多く拠っているようである。保孝と全斎とは直接の交際があったことが知られており、ここにいわずに学説の伝播というものが窺えるのである(註五)。また、村田春海についても、保孝が彼の孫弟子である(春海は清水浜臣の師)ということが、若き日の保孝に影響しているとも取れる。

宣長については、いろは歌の空海作者説を採っていることや、『韻鏡』の第十一転を合とすることなどについては批判しているものの、後者については「千慮ノ一失トハコノコトニコソ有ケレ」(第七丁裏)という表現をしており、また「宣長ノ説ハ、字音假字遣ニアリテ、人皆シルトコロナレハコ、ニ畧ス」(第六丁裏)ともあって、基本的には認めているようである。また「人皆シルトコロナレハ」との表

現に、宣長説の世間への通行の具合が窺える。

ここで国学に於ける、『弁誤』が著された文政五年当時の音韻論の水準について（一）ア・ヤ行エ段音の区別、及び（二）上代特殊仮名遣いの観点から見ると、（一）については、学史上有名な奥村栄実の説は、『古言衣延弁』が文政十二年（一八二九）の成立であるため未だ知られていないと見られるが、富士谷御杖『北辺随筆』（文政二年（一八一九）刊）に、父成章の説としてアヤ両行のエ段音の区別についての記述がある（註六）。また、江戸でどれほど知られていたかは判らぬが、遠江の人・鱸有飛（^{すゐりひ}二七五六〜一八一三）の『四十八音略説』及び『四十八音義訳』がこの頃には既に著されている。一方、（二）については、宣長の『古事記伝』（寛政二年（一七九〇）刊行開始）があり、また写本の形でしか伝わらなかったものの石塚竜鷹『仮名遣奥山路』（寛政十年（一七九八）頃成立）も世には出ている。

『弁誤』は、石塚等の説については言及もしていないので、（二）に関する論考は見えていなかったものと思われるが、（二）に関しては次のような言及が注目される。

ヤ行ノイ・エト、ア行ノイ・エト、音イトチカケレハ、御国ニテハ、一ツニキ、ナサル也。彼唐人ト字音ヲ定ムル時モ、ヤ行ノ格ノイ・エトテ別ニキ、ワケガタクコソアリケメ、假字モア行ノイ・エト同ジ字ヲ用フル也。シカレドモ、

理ヲ以テ推スニ、父字コトナルカラハ、ソノ生出セシノ音モカハルベキ也。（略）大田氏ノ改造ル五十音図ハ、同字一ツモナシ。其攷證正シク詳ナレバ、シバラクコレニ従フベキコト也。サハイヘ、今カナヲカクニハ、ア行ノイ・エト、ヤ行ノイ・エト、コトナルコトナシ。コハ上ニモイヘルゴトク、ムカシヨリ、ア行ノイ・エト、ヤ行ノイ・エトノケデメキ、ワケガタキユエニ、同ジ字ヲカク用フルナリ。或人四十八音考ト云書ヲ著シテ。ソノ中ニア行ノエラートナサント云ハ。卓見ニ似タレドモ。證ナケレバ取ガタシ。

③（註七）

右で紹介されている『四十八音考』は現在、国立国会図書館が蔵しており（『国書総目録』によればこれが孤本）、原本にあたってみたところ、これは先述した鱸有飛『四十八音義訳』と同類の本であるらしい（註八）。なお、引用文中の「ア行ノエラートナサント云」とは、ア行のエをヤ行のエと区別して、その字形を「一」としようということである（実際に有飛がア行エ段音の仮名として提唱した字形は「上」であるが）。

寺田泰政氏によると、先に挙げた『四十八音略説』『四十八音義訳』は、いずれも写本が遠江（静岡県内）に数点現存するのみで（寺田（一九八三））、また唯一刊行された一枚刷りの「四十八音図」についても「不思議にこれに言及

した文書が今のところひとつも見当らない」とされているので（同（一九九五））、『弁誤』は有飛の説が江戸にまで広まっていたことを示す貴重な資料であり、国語学（音韻論）史を描く上で注目に値するものと言える。

ともあれ、保孝はこの有飛案を採ることをここでは保留しているが、「ムカシヨリ、ア行ノイ・エト、ヤ行ノイ・エトノケデメキ、ワケガタキユエニ、同ジ字ヲカク用フルナリ」と述べるように、両者の発音は元々異なるものと考えていたことは読み取れる。尤も、これは「古書」に於ける万葉仮名の使われ方等から保孝が察していたということではなく、「理ヲ以テ推スニ、父字コトナルカラハソノ生出セシ子ノ音モカハルベキ也」と述べるように、あくまでも理屈の上からそのように考えたものであろう（註九）。

且つ、右はインドや中国の音韻体系についての想定であり、国語の音韻体系とは全く別個のものとして理解していたようである。と言うのも、いろは歌については次のように述べているのである。

（甲）コレハ天地間ノ自然ノ音四十七言ト、今様トカ云フモノ、字数ト、ヨリアヒタレハコソ一時ニ読ルナレ（④）

（乙）モシ此説ノコトク、字数ノタラヌユエニ同音ノ字ヲ字体ノミカヘテ、用ヌトイハ、今一字ヲモ加ヘ、又テニ

ハノタガヒモナキヤウニスヘシ、ソモく此哥ノ世ニヒロガリニタルモ何故トオモフニ、御国ノコトバ一ツモモル、コトナク又同音ナク一首ノ旨モヨクイヒトレルヨリノコト也、シカルニ同音モ一ツナラス三ツマデアリ、テニハノタガヒモアリ、且ワケモナク一言不足ノ句ナドアラバタレカモテアソバン（②、傍線引用者）

これらの記述からは、いろは歌を為す四十七字は、それが成立した頃の国語音韻の全体であると保孝は考えているということが判る。また、「天地間ノ自然ノ音」という表現から、おそらく四十七音体系以前の音韻体系は想定していなかったであろう（ついでながら、東条一堂は「夫四十四音、乃天地間自然之音」と述べていた『論』④）。

いろは歌が「同字」を用いずに作られた物であることは自明のこととして知られていた筈であるが、（甲）（乙）ではそれが「同音」を用いずに作られた物であることが明言されている。またそれと同時に、五十音図から導かれる音韻体系を国語音韻には持ち込まないとする立場も示されていることになる。五十音図については「シカレトモ此図ニヨリテ言葉ヲ生シテ造語スルニハアラス」（⑤）とも述べているが、この文言も五十音図は国語とは別の音韻体系を示すものと考えていたと理解すれば自然に捉えられる。

いろは四十七字が音の使い分けであることは、宣長の『漢

字三音考』にも述べられ（註十）、また『北辺隨筆』に遺された成章の説にも見える（註十一）。しかし、このうち特に後者については、音韻は減少を続けているという歴史的事実から逆算して、時代的に遡って五十音の完備した体系を想定している、則ちある意味では五十音図に縛られた考えになつてゐるのに対して、保孝は歴史の変遷についての展望を描けなかつた点では劣るが（既に述べたように四十七音体系以前の音韻体系は想定しておらず、ア・ヤ二行の二段音については国語音に於てかつてその区別があつたと考えたのではない）、五十音図を国語音韻の体系とは切り離して考えたことは、有効な判断であつたと言えよう。これは、五十音図は元々国学の為に作られたものではないのだから国学に於てこれに泥んで理屈を通そうとするのは危険であるという、村田晴海の主張を承けての判断と考えられる（『弁誤』でも引用されている『五十音弁誤』にこの主張が見られる）。

さて、音韻についての保孝のこのような理解は国語学史上でどのように捉えられるのだろうか。古田東朔（一九七八）で描かれている研究史では、漢字音上での区別を示すためにヤワ兩行にもア行と別字を用意した真名の五十音図を提案した太田全斎の『漢吳音図』（文化十二年（一八一五））に次ぐのは、仮名でこの書き分けを為し、且つその区別を

一部和語の表記にも適用した白井寛蔭『音韻仮字用例』（万延元年（一八六〇））であるという（註十二）。この間に、洋学の立場から、五十音図の各自に発音の別があつて、それは日本語の「古音」であつたと述べた大槻玄幹『西音発微』（文政九年（一八二六））や、仮名でも五十音各字を書き分けて所謂音義説に利用した富樫広蔭『てにをは辞玉櫛』（文政十二年（一八二九））などが世に出ているが、同時期の論考として保孝の『弁誤』を見ると、悉曇や韻学の観点から、全字書き分けの五十音図というものを理想としつつも、「古書」にその区別が見られないためにそれを国語音韻の理解には援用しなかつたことは、理論と実証を兼ねた態度（後者の精度にやや難があつたということではあるが）と言ひ得るのではないだろうか。

なお、四十七音体系が崩れた理由の一として、字音の流入を考えているらしいことが次の記述から窺える。

以為衣惠於遠等ノ唱呼ノ上ノケヂメ古ハ明カニアリシコトナランガ 中古以來アダシ国ノ文トモ入キタリシヨリイツトナクツネノ言葉ニモ字音多クナリテ 甚シキニ至リテハ言葉ト字音トノワカチタニワカラヌコトモアレコレ出来ニタリ又音便ノクツレ延喜ノ比ヨリヤハミユル也カハルコトヨリ純粹ノ音ヲケガシテ トナヘノワカラヌモ有ヘシ又此二種ニアヤマラレテ師曠ノ耳ヲ失ヒ口ニハ辨別ノオノツカ

ラアリテモ人皆キ、ワカラヌモアルヘシ 又字音ナド、マカ
ヘテ言葉ノ本義ヲトリチカヘ カルク伊ト呼ヘキヲ オモク
キト呼フナドヤウノコトヨリ混シタルモアルヘシ (10)

「延喜ノ比ヨリヤ、ミユル」という「音便ノクツレ」が
具体的にどのような現象を指すか不明であるが、アヤ行エ
段音の統合時期として推定されている時期と一致している
(またこれに関連して、「古書」の定義として「天暦以前ヲ
イフ」(11)としていることも、当時の国学者の認識を示す
ものとして注目される)。

なおこれらとは無関係ながら、以下に掲げる記述は、文
政期の江戸に於て動詞終止形の「ビ」が「ビ」と発音されてい
たことを示す一例となる。

扇ヲアフギト云ハアフグモノユエニアフキト云也(略)ソ
レヲヲフキヲフクトカキテハワカラヌ也 ロニテトナヘテ
モ、三言ツハケテイヘハヲフクニテモキコユベケレトモ一
言ツハイハ、ヲフクニテハアフクコトトハサラニキコエヌ
也 アフクナレハ一言ツ、ニテモワカル也 又アフクハ物ヲ
アフクコト也 オフク(左傍「畠久」ハ郡名(備前)ナリ (10)、
傍点引用者)

六、静嘉堂本との比較

既に何度か述べているように、今回取り上げた資料は、
その別本が静嘉堂文庫に蔵せられている。外題は「四十四
音論辨誤」となっているが、『論』と『弁誤』をこの順で載
せる、東大本と同一の体裁を持つ本である。『弁誤』跋文に
東大本と同じく文政五年とあるが、奥書はなく、書写年は
不明である(後述の理由により文政五年が書写年とは考え
られない)。書写者についても記されていないが、明治四年
の保孝のメモがあるので(保孝の自筆かは不明)、保孝の自
筆であるか、あるいは保孝が明治期まで所持していた本の
写しということになる。書写は東大本に較べて相当に丁寧
であつて、誤記は多いが逐一頭注などで直されており(書
入は朱・墨の両筆)、入念な見直しのされたことが窺える。
これを逆に言えば、この本は『弁誤』の元の形ではなく、
別本を写したものと考えるのが自然ということでもある。
本文を見ると、『論』については誤記の類を除けば東大本
と粗同一と考えて良い一方で、『弁誤』については、内容・
表現ともに大方は東大本と同じであるが、所々で異文があ
る。その中には小字分注を指示した箇所があり(11)、また
文章の本格的な推敲も数カ所に見られるため、保孝による
草稿ないしその写しと考えられる。

この点、実は東大本も「コレヲ伊点ト云フ小字分注ヲ加ルトキハ」(③)という文字列があつて、ここは静嘉堂本では「コレヲ」「伊点ト云フ」となっている。つまり静嘉堂本では「伊点ト云フ」という小字分注になっているのを、東大本ではその「小字分注」という語自体が本文に組み込まれているのである。これを要するに、東大本が元とした本に、浄書に際してはこの部分を割書にせよという意味で「小字分注」と書いてあつたのを、書写者がそれも本文の一部と取り違えて組み入れてしまったものと考えられる。そして、小字分注を求めるような書入のある本が東大本の元本であるとする、これ(東大本の元本)も保孝自身による草稿と考えるのが自然である。

東大本と静嘉堂本の本文の異なりの中で最も大きいのは『韻鏡』板本の挙げ方であり、前者で(甲)なのに対して、後者で(乙)という違いがある(表記法については後掲翻字の凡例を参照)。

(甲) 韻鏡ヲミルニ宋板ヲウケタル享祿本〔此本ノフルキコトハ文雄モイヘリ〕永祿〔此二本ハ狩谷榎斎所藏〕ノ寛文五年本〔大草某所藏〕寛文二年本及三年本〔及三年本〕〔此二本予所ノ儲藏〕並十一轉ハ開也。ソレヨリ後ノ寛文十一年本及元祿本〔此二本亦予所藏〕ノ天和二年本〔大田全齋所藏〕並作合也。又ソノ後延宝三年ノ刻本亦作開〔上村某所

ノ藏〕サテ文雄本合トナシ大田氏コレヲ改メテ開トスサレハ古キ本ハ開ニノ作レルヲ後ノエセモノ。サカシラニ合ニ改メシコトシルシ〔十一轉開ノ攷證大田氏詳ニノミイヘリ〕

(乙) 韻鏡ヲ見ルニ、享祿本〔宋板ヲウケタルモノニテ、皇國刊本韻鏡最第一ナリ〕永祿本〔コレモ享祿ニツ、キテノ古本也〕ヨリ、〔延宝三年ノ刻本マテ十〔五〕通、〔永祿十〔一〕轉開也、〇〔寛文十一年本太田氏嘉方訂〕ヨリ〕〔但シ延宝三年ヨリ四年サキ寛文二年ノ刻本ニ十一轉ヲ合トカケル〕〔古本〕〔始メナリ〕〕〔〇〔太田嘉方云モ校正本ナリケリコノ本モオノレ藏セリ〕〕〔天和二年ヨリ〕享保元年マテノ刻本〔六〕通〔此〔六〕通モ予藏セリ〕第十一轉合ナリ、上件ノ十〔五〕通ヲ背キテ、〇〔タ、一本ノ太田嘉方氏ノ校訂シタル本ニヨリテ〕第十一轉ヲ合トスルハ、取ニタラサルコト論ナシ、近來福山大田氏モ開ノ本ニ从ヘリ、〔此〔六〕通ノ俗ナルヲ、サトレルハ太田氏ニ始ラス、享保十一年ノ刻本ニハ、〇〔早く開ニ改タリ、漣窩ト云僧ノ〔後ニ還俗ス〕校正本也、コレモ予藏セリ、〕コノ外ニモ刻本有ヘケレトモ、浅学イマタ知ラス、

(乙) は、(甲) との相違もさることながら、それ自身の内部でも幾つもの追加や修正が為されており、本の収集に

応じて随時書き改めていったものと思われる。

ところで、東大本と静嘉堂本の本文を比較すると、静嘉堂本で、東大本と同じ文字列を書いた後でそれを訂正した箇所は幾つも存するが（A）、その逆は見られない。このことから、静嘉堂本の方が後の時点の写本であることが推定される。A以外の本文の相違も少なくないことから、静嘉堂本を元にして東大本が写され、その後で静嘉堂本に校正が加えられたということも非常に考えにくい。また、東大本で頭注になっているのが静嘉堂本では本文となっている箇所があるが（⑦）、これも元々頭注にあった記述を本文に組み込んだと考える方が、その逆を想定するよりも自然であろう。

また、東大本では『弁誤』の数カ所に文字の代わりに長線が引かれており（⑪など）、当初、これは書写者が文字列を写し切れなくて長線で代えたものと考えたのであったが、静嘉堂本では長線は全く存せず、該当箇所はそのまま文章が続いていた。では東大本の長線は一体何であるか。例えば、保孝が後で何か書くつもりで残しておいた空白部分だった、という可能性が考えられよう。静嘉堂本では、推敲の上で結局それらが不要と判断され、削られたのではない。あるいは、東大本の長線は、元本で文字列を墨で消していたのに代えたものとも考えられる。この場合は東大本よりも推敲の進んだ段階の本である静嘉堂本が、書写の段

階でこの長線相当部分を欠いていても何の不思議もない。いずれにせよ、静嘉堂本の本文が長線を省略していることは、東大本が静嘉堂本に先行することのもう一つの傍証になるであろう。

ところで、Aには、内容の訂正だけでなく、表現を改めたところもある。例えば次の如くである（上が東大本、下が静嘉堂本）。

- 四声ニモアレ韻頭マレ ↓ 四声ニモアレ韻頭ニモアレ ⑨
- イソシムベシ ↓ 可賞 ⑨
- アレコレ ↓ カレコレ ⑩
- タリヌ（足） ↓ タラヌ ⑩
- イハハ（言） ↓ イハハ ⑩
- スヘキト（可） ↓ スヘシト ⑫

他にも、Aには該当しないが、東大本で「ヒロガリ」とあるのが静嘉堂本では「ヒロゴリ」となっているなど、内容だけでなく文章の面でも、よりきちんと成形しようという意志が窺われるのであって、保孝がこの書の刊行を志したものは不明であるが、一旦跋文まで認めた後にも論拠と文章とを整理していったことが知られるのである。『論』の本文全体を分割し、その逐一について反論を加えてゆくという体裁からしても、保孝の本書に対する熱の入れよう

が窺えよう。

東大本の元本と静嘉堂本の元本とは同一であろうか。興味深いのは平仮名で書かれた『弁誤』の跋文であつて、東大本は片仮名を交えているが、平仮名の部分を静嘉堂本と比較してみると、その字体は両者で大凡共通しているのである。しかも東大本が静嘉堂本を写したのではないらしいことは既に述べた通りであるし、且つその逆は有り得ない。両者の祖本が同じであつて且つ東大本の方が古形を残していると考えるのが一応自然であるように思われる。

東大本と静嘉堂本との本文異同については、その逐一を後掲の東大本翻字に於て示すこととする。

七. おわりに

以上、『四十四音論／同弁誤』について、東大本の書誌情報を示した上で、本文の内容について観察した。

只、今回は『弁誤』から読み取れる保孝の音韻意識と、その学史上の位置付けとの検討にほぼ終始した。具体的に挙げた事項には、国語史・国語学史の理解に有益な点があったと考えるが、全体的に『弁誤』に傾注して『論』は殆ど扱えなかった。実は一堂は保孝と交際のあつたことが『況

齋著述年譜』によつて判っている。一堂は、年齢差から言つて（保孝より一九歳上）、他のより近い世代の国学者とも付き合ひがあつた可能性は高く、『論』はそうした交際によつて刺戟された著作かとも思う（但し「和行為^{オウギ}恵^{オウ}於^ニ」）『論』③のような表現は、宣長以前の学説を前提にしていることを窺わせる）。一堂と保孝それぞれの人脈をつぶさに見てゆくことで、今回も触れた「学説の伝播」はより鮮やかに描ける可能性がある。そうした、当時の学者たちのネットワーク、人と学説の繋がり把握する足がかりとしても、当時の大儒学者による国語音韻についての主張と新進の国学者による反論とを併せ収めた『四十四音論／同弁誤』は有用と言えるのではないだろうか。

補註

- (一) 藤本・平井・竹入（二〇一〇）。また、黒川文庫については日本書誌学大系『黒川文庫目録』も参照のこと。
- (二) また、国立国会図書館蔵『岡本保孝著作目録』にも「四十四音論辨誤（一、堂東條氏四十四音論／岡本保孝弁誤）」とある（第四丁裏、傍点は引用者による）。
- (三) 「文化十四年（一一八七）二十一歳で清水派臣の門に入り、国語・国文研究の指導を受け、恐らくその奨めで、文政二年（一一八九）狩谷掖斎の門を潜った」（一一四ページ）。
- (四) 『況齋著述年譜』（静嘉堂文庫蔵『岡本況齋雜著』第一〇九

冊)には文政三年(一八二〇)、保孝二十四歳からの記録がある。それをそのまま数えると文政五年の『四十四音論辨誤』は保孝の四本目の著作である。

(五) とは言っても、親しく付き合ひのあつた義門の論考に度々意見して『男信』の成立に関わつた(三木幸信(一九六三))ことや、何より、東条一堂その人と交際のあつたことから、保孝が知人の説ならばそのまま受け容れたのではないということとは明らかである。

(六) 寺田泰政(一九六五)による。

(七) 以下、引用に際しては後掲「翻字」での分類番号によつてその位置を示す。また、誤記等についてはことわざに直した。引用については以下同様。元の形は後掲の翻字を参照されたい。

(八) 『四十八音考』は外題であり、目録題は『四十八音義譯』。

但し、寺田(一九八三)で紹介されている『四十八音義訳』の引用と比較すると、音図や文面に違いがある(音図はむしろ『四十八音略説』に近い)。本稿で「同類の本」と述べたのはそのような理由からであるが、この『四十八音考』が『四十八音義訳』や『四十八音略説』といかなる関係にある本であるかについては本稿の趣旨に関わらないので立ち入らない。

(九) なお、静嘉堂本の書入(「明治四年九月十九日夜、追書」)により、晩年にも保孝がこの考えを保持していたことが判る(翻字『弁誤』③参照)。

(十) 「古言ノ正音ハタゞ四十七ニシテ。ヤノ行ノイェト。ワノ行ノウトヲ加フレバ。都テ五十ナリ」(寺田(一九八三)による)。

(十一) 「あがりての世には、人のこゑ五十ありけらし。そのうちふたつは、やうくうせて、あめつちの歌のころは、四十八になりぬ。それが又、ひとつうせたる世に、いろはの歌はいできたり、いろはの歌、四十七のうちに、今はよつうせて、四十四のみぞある。かくのごとく、音のうせゆくにしたがひて、かななづかひといふ事いできにたり」云々という記述がよく知られているが(巻之三。引用は『日本随筆大成』(第一期)15(一九七六年、吉川弘文館)に基づく)。なお『北辺随筆』の刊年は『弁誤』著述の三年前である。

(十二) 因みに、この両書とも黒川文庫「辞書」部に蔵書がある。

参考文献

榎 一雄(一九七七、八)「岡本保孝のこと」(『榎一雄著作集第十巻

雑纂』(汲古書院 一九九四年)所収)

国語学会編(一九七九)『国語学史資料集』(武蔵野書院)

寺田泰政(一九六五)「ア行・ヤ行のエ音分別研究史における鱧有飛の位置」(国学院大学『国語研究』二二号所収)

寺田泰政(一九八三)「国学者鱧有飛の音韻研究——『四十八音略説』『四十八音義訳』について——」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一巻 国語学編』所収)

寺田泰政(一九九五)「新居宿の文人 鱧有飛・有鷹について」(『新

居関所史料館特別展 鱧有飛・鱧有鷹展』図録に所収)

東條會館編(一九六六)『儒者東條一堂小傳』(東條卯作発行)

錫田恵吉(一九五三)『東條一堂傳』(東條卯作発行)

藤本 灯・平井吾門・竹入 優(二〇一〇)『東京大学国語研究室蔵

黒川文庫目録(辞書之部 あゝう)『日本語学論集』第

六号、東大国語研究室)

古田東朔(一九七八)『音義派「五十音図」「かなづかい」の採用と

廃止』『小學讀本便覧』(武蔵野書院)所収)

丸山季夫(一九六二)『泊酒舎年譜』(私家版)

三木幸信(一九六三)『義門の研究』(風間書房)

付(一)、東大本の書誌情報

四十四音論 しじゅうしおんろん 東条一堂

写一卷一冊 江戸後期 27-330 L67008

○弘化二年(1845)写、袋綴、薄花色無地原表紙、楮紙、24.7

× 16.4^{cm}、界線なし、三丁、一頁九行、漢・片、序跋なし、

巻尾に「(墨)湯臺游民 東條弘撰」、二書合冊(四十四音

論弁誤)

〈印記〉頼、道、東図、国語、〔東大〕

〈表紙〉(右・直・朱)岡本保孝著

〈外題〉『四十四音論』

〈内題〉・巻首…『四十四音論』

〈書写奥書〉弘化二乙巳春正月会三日／即日書写畢(花押)

四十四音論弁誤 しじゅうしおんろんべんご 岡本保孝

写一卷一冊 江戸後期 27-330 L67008

○弘化二年(1845)写、袋綴、薄花色無地原表紙、楮紙、24.7

× 16.4^{cm}、界線なし、八丁半、漢・片、文政五年(1822)

自跋、巻首に「(墨)岡本保孝著」、二書合冊(四十四音論)

〈印記〉頼、道、東図、国語、〔東大〕

〈表紙〉(右・直・朱)岡本保孝著

〈外題〉『四十四音論』

〈内題〉・巻首…『四十四音論辨誤』

〈書写奥書〉弘化二乙巳春正月会三日／即日書写畢(花押)

付(二)、翻字

【凡例】

一、東大本『四十四音論』『四十四音論弁誤』全文の翻字を

掲げる。また、静嘉堂本との相違点も(静)として示し

た。(但し字体や句読点等の異なり、東大本での明らか

な誤字との相違については省略した。また、静嘉堂本は

基本的にルビを付さないでこの点についての指摘も省

略した)

一、濁点、句読点、傍線、ルビは全て原文を模した。とり

わけ傍線は引き誤りと思われる箇所が多いが、直さなかつた。(原文では、句読点には「、」を用いるのが普通であるが一部「。」を用いている。一応これも翻字に反映させたが、使い分けているわけではないようである)

一、右の他、読解の便宜を計つて半角の空白を適宜挿入している。(但し、原本を再現した空白(闕字など)や改行もある)

一、漢字は原文の字形の再現を原則としたが、版下製作の都合上、必ずしも厳密でない。

一、仮名は平仮名・片仮名ともに現行の字体に改めた。合字の類も現行の仮名に改めたが、説明の都合上残したところがある。

一、原文の改行位置は／で示した。また、丁が改まる毎に(一〇)のようにして示した。

一、小字分注は「」で括り、分注内部での改行は示さない。また、助詞等の小書きについては特に翻字に反映させなかった。

一、疑問のある字はルビに疑問符を付した。また、字形としてはAであるが文脈上Bと考えられる場合は、「A」などのように記した。

一、語句の挿入・補入については、原本で挿入符「○」を用いたか否かに関わらず、「○(一)」という形で示した。

一、抹消された部分(見せ消ちを含む)は、判読可能な場

合は「」に括つて示し、書き改められた字句をルビとして振つた。判読不可能な場合は■とした。

一、『弁誤』では、『論』の全文を一二に分割し、その各々について反論や説明を加えている。両者を参照しやすいように、『論』を『弁誤』に倣つて分割・改行し、各々の頭に①から⑩の番号を私に付した。また、『弁誤』にも各見出しの上に対応する番号を付した。

(一〇) 四十四音論

① 以呂波四十七字之未出也、我邦之音、有四十四而已*、
／以呂波也者、和歌之長篇、七言与五言、遞而成章者也、

② 誤以呂波者、以*四十四音為歌、而四十四、不滿其數、
故加／為於惠三字、其音與以遠江同、嫌重出故異字
體、其／実則四十四音耳、

③ 後造五十音圖者、班四十四音、每竹^(ツ)／五字、折以七
音、唯喉音有阿和也三行、蓋也田^(ツ)*與和／四音、亦不
滿其數、採之阿行、補其不足、分為也和二行、和行為惠於
三字、乃仍以呂波所舊貫、以易其／(一〇)體耳、字則無
其可易、直徒*本字、也行以與江亦然、可／謂窮矣、

④ 夫四十四音、乃天地間自然之音、今要其必／合於歌句七

五之數、安得無有餘不足之差、夫物之不齊／物之情也、索其以^{*}五五相比四面劃然如棋局、又安得／無有餘不足之差、是為^{*}惠等之所以加添、非有開合之／別也、

⑤ 世之講假名者、曰以江於開音、為^{*}惠遠合音、／其解音圖也、謂阿行為開、和竹^{*}為合、而遠屬／阿行於屬和行、其說不通、則又移易其位、係／於乎阿行、係遠乎和竹^{*}、

⑥ 然、而於合○(意)與烏同、

⑦ 其它／(2オ)如淤飫永役郁澳類、国籍所載、皆未必如其言／焉、

⑧ 夫假名之為體、非假借彼方字音者邪、字音／必有韻、我邦四十四音、則無韻、故其所假、特在【者】而不／在韻、豈唯韻也、四聲清濁、字母韻、頭、及開發收閉、豪^{*}無／關涉、何独至于開合疑之、

⑨ 況若阿和也三行、彼所無也、／凡字音、傳我者誰、非彼邪○(所)無^{*}、我焉得有之、或曰、彼無之／者、非實無、初不立是例故也、故當其傳我時、即其所呼、／自不覺之、在我所聞、不能辨之、譬如我不立四聲、在其／所呼、不自知其孰平孰去、彼聞之亦必能別之、憶稽無度^{*}／(2ウ)

【無】加焉

⑩ 果如其說乎、嘗試呼之○(孰)以於江^{*}、孰為遠惠彼与我、不有
一人能辨之者、我／古之人、獨何口耳而能聞而言之、
⑪ 或曰為者字為也、／惠【也】字惠也、遠者字遠也、以
——^{*}為等於開合、猶幾／與久為也、斯說似有理矣、

然如是則世有寸惠、禍有奴惠、己／有久遠、曾有寸遠、四十四音孰不然、易^{*}為是不皆立開／合、独在以為等乃尔、要不免於牽強【也】、

⑫ 吾迹其所錄^{*}、／蓋誤解億弘之所致也、市邊皇子、兄曰億計弟曰弘／計、億弘之為假名、古音相通、而韻書億收開轉、弘○(■)合○(■)轉、／說者謂不得有兄弟【間】稱、開合之說、於是乎起、乃曰、億音／(3オ)於弘音遠其所呼自異、即以為江惠、亦以此準之、卒／謂國音為四十七、抑以呂波為之厲階、今按譜第曰、億／計王、更名嶋稚子、弘計王更名來目稚子、則億計弘計^{*}／者、其幼字也、古也質已、幼字同稱、或有之、何以知其然邪、日／本書紀曰、市邊皇子、為^{*}大泊瀨天皇見殺、億計弘計／聞父見殺、逃匿播磨、俱改字曰丹波小子、由此觀之、其所／俱改之字、亦為曰稱、億計弘計同音可知矣、即^{*}億與弘同、／則於與遠奚折、於與遠奚折也、以為江惠亦奚疑、意^{*}誰／謂有開合之殊哉

(32) 湯臺游民 東條弘 撰

二而已↓(靜)而已矣^{*}、↓(靜)次^{*}竹↓(靜)行^{*}田
↓(靜)由^{*}徒↓(靜)從^{*}以↓(靜)必^{*}竹↓(靜)行
↓竹↓(靜)行^{*}所無↓(靜)彼所無^{*}憶稽無度↓(靜)
憶稽縣度^{*}○(靜)「——」なし^{*}二易↓靜局^{*}○(靜)「錄」
を消して頭注で「蘇」補入(朱) ^{*}○(靜)頭注で「也」補入(朱)

*14 (静)「為」の次に一字闕字 *15 (静)「即」左傍に「既イ」
(朱) *16 意↓(静) 噫

(4オ) 四十四音論辨誤

岡本保孝著

終篇僻説ニシテ一言半句ノ採用フヘキモノナシ、吾
師サ、ナミノ*アルシ常ニイヘラク、何クレノ書
ニテモ、エセモノ、ヒガコトセルハオキテ、物シリ
人ノシルシオク*ル書トモノ上ニテ、一ツニツノ
誤レルヲタシテ疵ナト*玉ニナサントイヘリ、ゲ
ニシカアルコトニテエセモノ、物セルヒガコトニ
カ、ヅラ^ヒテハ隙ノミ入テ、ヤクノナキスサヒ也イ
デヤ、此書モエセモノ、物セルニテ、サシオクヘキ
キハノモノノナレトモ、ツクリヌシノアツラヘラル
、モイナミガタクテ、師【人】教ニソムクトハシレ
ノトモ、イサ、カ筆ヲサシヌラシツ、

ニ(静)「屋ノ」挿入 *オクル↓(静) オケル *ナト玉↓(静)
ナキ玉

① 以呂波四十七字之未出也止而成章者也

以呂波イデコザル前ニハ御国ノ音、四十四ノミトハ、
何事ソヤ、ソレイロハノ、七言ヲ以テ、句ヲ起シ、

七五々々ト次第シテ、八句ニテヲハル、コレハ古ク
ナキノトコロノ体ニテ、今様トカイフモノ也、時代
モ花山一條ノ比ナリ〔春海スデニイヘリ空海ノノ作
ト宣長ノイヘルハ、深ク考サルノアヤマリナリ、〕サ
テ古書〔天曆以前ライフ〕*、開轉ノ以衣於、合轉ノ
ノ為惠遠、並ニアマタオホク*シカレトモ、以為等
ノケデメ分明ニシテ、混ノ用セシモノナシ コレニヨ
リテモ、四十七言ナルコト*論ナキコト也〔下ニ詳
ニイフベシ〕

*〔ライフ〕↓(静)〔ライフ〕ニ *オホク↓(静)アリ *
コト↓(静) コトハ

② (4エ) 誤以呂波者止 四十四音耳

以呂波ノ哥イデコザル前ニ、果シテ四十四言ニシテ
此哥ヲ作ルトキニイタリテ、ノ不足ヲ補ノミノコト
ニアラハ、為惠遠ノ三字ニ限ルベカラス、シカルニ
此四十四音ノ中ヨリ、此三音ヲシモ、拔出セシ*
ハ、何故ト心得ルニカ、且イツレノ字ニテモノ假字
ニカリキテハ、開合ニテ心ノカハルハ、古書ノ中ニ
モナケレトモ、以為等ノケデメノミ、開合ニヨリ
テ大ニ意ノカハルコトナリ 此哥モト四十七言ヲノ以
テ一首ヲナサンノ心ニテヨメルナレハ、句*ノ中一

句六言モアリ、又テ／ニハノヨカヌ^ニトコロモアリ、シカレトモ同字モナク、假名ノタカヒモナク、一首ノヲナセル也、モシ此説ノコトク、字数ノタラヌ【ヘ】ニ同音ノ字ヲ字体ノミ／カヘテ、用ヌトイハ、今一字ヲモ加ヘ、又テニハノタガヒモナキヤウニスヘシ、ソ／モ／此哥ノ世ニヒロガリ^ニニタルモ何故トオモフニ、御国ノコトバーツモモ／ル、コトナク又【何】音ナク一首ノ^モモヨクイヒトレルヨリノコト也、シカルニ／同音モ一ツナラス三ツマデアリ、テニハノタガヒモアリ、且ワケモナク一言不／足ノ句ナドアラバタレカモテアソバン、古ヘワラハベノ始テ筆トル時ハ、浅ノ香山難波津ノ哥ヲナラハセ^ニケルヲヤウ／今ハナベテイロハノ哥ノヲ用フルヲモオモ^ニヘ

ニセシ↓(静) シシ^ニ句↓(静) 八句^ニヨカヌ↓(静) ヨカラヌ^ニヒロガリ↓(静) ヒロゴリ^ニナラハセ↓(静) ナラハシ

③ 後造五十音圖止 可謂窮矣

五十音圖ハ、何人ノ作ナルカ詳ナラス、釋氏ノ物セルコトトハオモハル、ナリ、／^ニオ^ニイカニトナレハ、コト／ク梵文ニ依レハ也、悉曇字記一卷今モ人間ニアルナリ、／コレハ空海彼土ヨリ帰レル^ニトキニ、

【持来^{コシ}】ル^ニフミドモノ中ノ一種也、〔空海ノ請^{コト}来録ト云フモノアリ〕／コノ書ヲミテ体裁ヲシルベシ〔悉曇字母表ト云フモノアリ、唐ノ一行ノ作ト云フ便利ノモノ也、實ハ偽書ナレトモ、又^ニ見ズンハア／ルベカラス〕^ニ此圖釈氏ノ学ノタメニ作レル〔右傍^ニシ^ニ書ナレハ、オロ／彼書ニミユルコトヲイハン、／唐智廣悉曇字記序云 原始垂則四十七言、寓^{コト}物合成、隨事轉用、又涅／槃經ニハ、字母五十字、又^ニ十四音^ニ〔アイウエオカサタナハマヤラワノ十四音〕名曰字本トモ説^ニリ、西ノ城記莊嚴經ニハ、四十七言ナド、モアリテ^ニ、五十音及四十七音ハ、天竺ニモアル／コト也サテコノ音ノタマ／天竺ト御国ト妙用符合セルナリ、コ、ニアグル／トコロナトヤウ^ニノコトハ、釈氏ノ書ヲタツヌレハ、アマタオホク^ニアル也 今畧ス／五十音圖ハ伊呂波ヨリ古キモノナルコト論ナシ〔イロハノ出来テ^ニタル時代ハ上ニ云ヘリ〕五言々々／ト句局セル伊呂波ヨリ古キモノナルコト論ナシ〔イロハノ出来ニタル時代ハ上ニ云ヘリ〕五^ニ々々ト句局セル^ニモ伽陀ノ一体ト或人ハイヘリ、字及也行以衣ノ其字体ノヲカヘサルコトヲ、イヘルモヒガコト也、果其説ノ如ク以呂波ノ哥ニ、以衣遠ノ^{ノ三字}ヲカヘサルコトヲイヘルモ^{ノ字}ノニテ、今五十音圖ソノフルキシニシタカヒテ、同音、

(靜)「請」に頭注「將」 *4 又↓(靜)コレ又 *5(靜)「此」の
上に頭注で「サテ」補入 *6 作レル↓(靜)作シ *7 寓↓(靜)萬
*8 涅槃經↓(靜)南本ノ涅槃經文字品(南本ノ「文字」「品」は
挿入)ニハ、「字母五十字、又」 *9 十四音↓(靜)十四音也 *10
名曰アリテ↓(靜)名曰字トモ〇(トキテ)【説、西域記華(右傍
に一字(莊)か)嚴經ニハ四十七(右傍ニ)言ナドトモアリ】△
(挿入符。別箇所に「北本ニハ如來性品ニノセタリ字面ハ同シ」△
とあり) *11 ナトヤウ↓(靜)ナ【トヤウ】 *12(靜)「オボク」
なし *13 持来テ↓(靜)出来ニ *14(靜)「伊呂波ヨリ(二度目)
く句局セル」なし *15 用フルト↓(靜)用フト *16(靜)頭注で
「ワ行ノエノ字」補入 *17 キ、ウケ↓(靜)キキワケ *18(靜)
「シカレトモ理ヲ以テ推ス」に宋で二重傍線、頭注に「明治四年九
月十九日夜、追書、シカレトモ理ヲ以テ推スニシカ」ト云コトハ、
同僚黒川氏ノ説ニ、阿行ノ【以】ト也行ノ以ト、自ラ別也(エノ字
亦同例)トテ、其カケルモノヲ見ニ、ヤ行ノ阿ノ詞ニハ、必文字ヲ
異ニシテカ、レル也、孝ノ此ニ辨スル処ト、全然同一ナリ、シカレ
トモ記紀萬葉、其他ノ古書ニ、阿行ニ行ノ以衣混書ナレハ、オノレ
ハ黒川氏ノ説ハウヘナヘトモ、筆迹ハ用ヒス、オノレ此辨語、カキ
タルハ、文政五年ナレハ、大凡五十年近クナリニタリ、(読点、傍
線、「伊」の修正は朱筆) *19(靜)「生」と「出」の間に音合符 *20
(靜)ベキコト也 *21(靜)【コレヲ】「伊点トイフ」ヲ加ル *22
(靜)用フル *23(靜)サハイヘト *24ー(靜)ー

④ 夫四十四音乃天地間止別也

以呂波ノ哥ノコト。上ニモイフ如ク。杜撰ニ同音異跡
ノ字ヲ加ヘシニアラス。ノ若此説ノコトクナレハ。
甚^マキ *1 哥ニテ誰カコレヲ賞セン。コレハ天地間
ノ自然ノ音四十七言ト。今様トカ云フモノ、字數
ト。アリアヒタレハコソ一時^ニノ二読ルナレ。(著聞
集ニハ十二句 盛衰記ニハ十句ノ今様アリ シカレド
モ八句ガ多キナリ) 五十音圖モ。スデニイフコト
ク。天竺ヨリノ起リニテ、ミダリニツクレルニハア
ラス。其拠甚正シキ也

* 二棧↓(靜)拙 * (靜) 一時ノ興

⑤ 世之講假名者止係平和行

※四十四音論では「係遠平和行」
遠於所屬ノコトハ宣長モ春海モイヘリ。春海ノコトバ
ニ云。阿行ノ於ノヲ乎ト改タルハ契沖カ和字正濫抄
ニ五十音ノ圖ヲ出セシ *2 ニ。シカシルセノシ *3 【モ】
ミニテ。古クハナキコト也コハ契沖カ悉曇ノ上ナド
ヨリ。フトオモヒノ誤リシモノトミユ、古キ物ニハ
定家卿ノ明月記ニ阿以宇江於トシルサレ 釈日本紀
ニモ阿伊宇江於之五音相通トイヒ又伊与於五音ノ相
通 *4 トモイヘリ。又天文年中ノ人ノ書タル畧本和名
抄ノ始ニ五十ノ音ヲ舉タルニモ阿伊鳥衣於トシルシ

〔鳥ヲ字ノ音ニ用タルハ*古ノ例ニタカヘト誤ニハアラス〕／〔6ウ〕林春斎力類字假字遣ノ跋ニモ、安以字江於ト書リ、カ、レハフルク／ヨリ春斎ガ比マデハ、於ヲ阿行ニ置シコトナリシヲ契冲ヨリ[※]レル／コトシルシ〔五十音辨誤ニミユ〕宣長ノ説ハ、字音假字[■]遣〔右傍「用格」〕*ニアリテ、人皆シノルトコロナレハコ、ニ畧ス。イテヤ萬ノコト何事ニテモ其本ヲシラスシテ／末ニノミカ、ツラヒテハ。其旨ヲウルコトアタハス。故ニ*コノコトヲオロ／イハシ。ソモ／伊呂波哥モ。五十音圖モ。御国マナビノ為ノモノニアラス。／シカルニ物ヨクモ心得ヌエセモノハ。此二種ノコトヲモテ。カケマクモカシコキ／御国マナビノ第一ノ階梯トオモヒ。ヒタスラニコレニヨリテ學問ヲモセン／トシ。又此書ノコトキヒガコトモ。ミナコ、ニタヨリテイヒイツル也。此二種ハナク／テモ。御国マナビニコトカクコトハナシ。學者カク心得テ。サテオモフニ。伊呂波ノ／哥ハ。童子ノタメニイトヨキモノ也。五十音圖ハ。御国マナビスルモノ。コレニヨレハ／サトリヤスキコトアリテ*今トナリテハ一日モナクテハ。コトカク*ヤウニマデ／オモハル、也シカレトモ此圖ニヨリテ言葉ヲ生シテ造語スルニ【ア^ハ】アラス固有／ノ言葉ノハタラキヲ此圖ヲカリテ人ニモサトシ或語釈ノワ

カラヌコト／ナドヲ。カウカフル。一ツ梯トスルマデナリ。モト他ノモノナレハ。コレヲ用フルニ／心ノアルヘキコト也。〔此圖ニナツミテアシキコトハ春海モイヘリ〕御国ノコトババ假字ニテカキワ／クルコトハムカシ音ヲサダムルトキ。字音ノカルクキコユルトオモクキコユルト／アリ〔輕ハ開重ハ合〕サテコトババカキツクルトキニ。ヤ、カロキコトバ、字音ノカル／^ハオモキヲ以テカキ。コトバノオモキハ字音ノオモキヲ以テカク也〔輕重ハ伊為ノ類〕／先輩モイヘルコトク文字ヲ*イトカルク奴僕ノコトク心得ルトコトナレハ。／ソノ文字ノコトナドニテ。御国風ヲヤブラントスルハ。ウケヌコト也〔釈氏ニ文学*。／般若ナト云コトアリコレハ又別ニ論ス〕

〔靜〕出シシ^ハシルセシ↓〔靜〕「セ」を消して右に「シ」〔靜〕五音通 *用タルハ↓〔靜〕「ハ」なし *〔靜〕「用格」の補記なし *〔靜〕「アハタス、故ニ」カタシサレハ *アリテ↓〔靜〕アリ、*〔靜〕コトカクル *〔靜〕文字ヲハ *〔靜〕文字

⑥ 然而於合音与鳥同

古ノ漢籍ニ。於乎于通シ用ヒシコト有。又於鳥本同字ナルコト説／文ニミユ。サテ於乎于通用ノ方ニテイヘハ。於ハ開ニ乎ハ合轉トハ／ヤクヨリワカレ。

於鳥同字ノ方ニテイヘハ。ハヤクヨリニ字トワカレ
ノ一ハ虚字一ハ實字トナリテ合ト開トノワカチアリ
御国ニテ用フルトコノロハスデニ於ハ開ニ鳥ハ合ト
ワカレシヨリ後ノコト也

*韻鏡ヲミルニ宋板ヲウケタル享祿本〔此本ノフルキ

コトハ文雄モイヘリ」永禄〔此二本ハ狩谷掖斎所藏〕

／寛文五年本〔大草某所藏〕寛文二年本及三年本〔及

三年本」〔此二本予所／儲藏〕並十一轉ハ開也。ソレ

ヨリ後ノ寛文十一年本及元禄本〔此一本亦予所藏〕

／天和二年本〔大田全齋所藏〕並作合也又ノ後延

室三任ノ亥卯ノ作開「上村其所ノ藏」サテ又旅本台

ニノ年ノ後ノニノ年。十ノ年ノ二令ニ收ル

ノコトノレノ「十一」専門ノ文登大田氏羊二ノ

Author	Year	Country	Sample Size	Method	Findings
Alm and Chabris	1995	USA	100	Lab	High levels of inattention during a concurrent task.
Baker and van der Horst	2000	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2001	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2002	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2003	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2004	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2005	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2006	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2007	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2008	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2009	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2010	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2011	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2012	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2013	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2014	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2015	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2016	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2017	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2018	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2019	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2020	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2021	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2022	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2023	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2024	Netherlands	100	Lab	Increased errors in a driving task when a secondary task is introduced.
Baker and van der Horst	2025	Netherlands	100	Lab	Reduced reaction times when a secondary task is introduced.

コレニ付テ疑アルハ宣長云第十一傳ハ合也 本開トス

ルハ非也トイヘリ／サテくコハロエヌコト也。洪

武正韻ニ此轉ヲ撮口呼トナシ、ヨリ文雄モ／アヤマ

リ宣長モフトソレニ因循セシナラン、——此轉モシ

開ニテアラ／ハミツカラノ説モヨクタツベキコトノ

アラシニ千慮ノ一失トハコノコトニ／コソ有ケレ

「韻鏡ヲミルニ」以下は、「韻鏡ヲ見ルニ、亨 祿本〔宋板ヲ

* (静)「韻鏡ヲミルニ」以下は、「韻鏡ヲ見ルニ、^(マ)亭^(マ)本〔宋板ヲ

⑦ 其它止其言焉

淤飫並二十一轉開二屬スオノカナ論ナシ

永 外轉三十四合、喉音、上声^{*}、喻母三等二属スレ

ハ、エイノ疑ヒアルニ似タリシカルニ此轉スヘテ

三四等ノ吳音開也* 故二喉音去音喻母三等二属スル

詠ノ字モエノカナニ用フ^キ

役 永ノ字ト同轉 喻母ノ四等ニアレハヤハリエノカナ

也 且 喻母ノ四等ノハヤ行ノ定格ナルヲヤ

郁 第一轉合ニ属ス故ニ^キユク也 宣長^{イイ}イユクト云ハ

アヤマレリ^キ

問 曰 的ライクハクトヨム 的氏ノ建タル門ヲ郁芳門

ト云フ〔拾芥抄ニ[■]ノモミユ〕コレイノ假字ニアラ

スヤ 荅曰 字音ニ上畧アリ中畧アリ下畧アリノ^{（モミユ）}

〔大田氏既イフ〕一ニライハ、育波ヲ以久波ニ用

フルハ中畧ナリ〔ユラ畧ス〕菊ヲ^{キキ}キク竹ヲ^{チク}ヲチ

クト云皆同例也 宗則ノ字ヲソノカナニカルハ下畧

也ノ〔ウ〕クヲ畧ス^{イヨイヨ}余与豫ヲヨニ用フルハ上畧也

〔イヲ畧ス〕——^キ郁芳^{キハク}（郁^キの偏は「者」の

下部が「月」となっている字形ノハ上ノ郁ノ音^キ上畧下

ノ芳ノ字ノ音下畧也〔^キウヲ畧ス^キ〕故ニユクハト

ヨム也ノ又問曰 的ハイクハク也^キユクハニアラ

ス。イカハ。荅曰 新撰字鏡ニ的ヲノ由久波トヨメ

リ。ヤイユエヨノ通音^キナレハイクハトモイフ也

故ニ和名抄ニノ射琛ヲ以久波止古路トヨメリ 郁芳

トカキシ^キユクハノカタニテカキシ也ノイクハノカ

タニテ用ヒシニハアラス^キ

（頭注）景行紀十八年八月、到ノ的邑而進食、是日膳ノ夫

等、遺盛、故時ノ人号其忌（谷川氏日忌当ノ作忘）^キ茂

處曰浮^キ羽ノ今謂的者訛也昔ノ築紫俗号盛曰浮ノ羽、

コノ文^キニヨリテア行^キカノトモオモフ人アラメト

ノコレハ本別語ナリノ紀ニイフ處ハサカウキ^キ也ノ

今コ、ニロンスルトコロト^キハノコト^キニコト也オ

モヒタカフベノカラス

澳 郁ト同位ナレハ上ノコトワリヲミテシルベシ

カク細微ニセンサクラスルトキハ古書ノ杜撰ニアラ

ス

*（靜）「上声」二字ミセケチ^キ（靜）頭注で「本居氏字音假字用

格（三十三ウ）太田氏漢吳音【圖】（卅七ウ）ニコノ說アリヒラキミ

ルベシ」補入^キ故ニ用フ（靜）且古本無用永詠之假字者、置

而不言亦可也、^キ第一轉^キアヤマレリ（靜）第一轉古本三十開也、

イノカナ論ナシ、試ニ合トセシニモ假字ハアヤマリナカルベシ、サ

ルトキハ、^キユク也、宣長ノイユクト云ハ、アヤマレリ、^キ（靜）竹^{チク}

*（靜）線なし^キ音（靜）字ノ音^キ（靜）畧ス^キイクハ

ク（靜）イクハ^キ通音（靜）通韻^キ（靜）この後「トモ

イフヘシ、サテ景行紀十八年八月」と、東大本での頭注が本文と

して続く^キ浮（靜）さんずいに「字」^キコノ文（靜）ト

アル^キア行（靜）「ア」を消して「ワ」に^キ（靜）サカツキ

*^キト（靜）ノ^キコト（靜）マト

⑧ 夫假名之為体止疑言

我邦ノ音ハ直音ニテ濶々雑々ナルコトナシ 故音少ケ
 レトモ彼此トリアハ／セテ無量ノコトハノハラ*物ニ
 ル也〔本居既ニイフ〕サテソノコトハノハラ*物ニ
 カキツクルトキ／他國ノ字ヲカク*用フル也シカル
 トキハ先字音ヲ正サズバ*アルベカラズ 故ニ古ハ／
 (82)音博士トミ*モノアリテ彼土ノ音ヲマナバセ
 サテソノマ、ノ唐音ニテ／ハアマリ雅純*ニアラス
 トオモヒ昔人ガ*彼土ノ音韻ノ趣意ニモソム／カス
 サテ*御國ノコトバニモ近ク耳ニキ、ヨキヤウニ定
 メシ也 スナハチ／今日所用之字音是也ソノ字音ヲ辨
 スルニハ四声ニモマレ*韻頭マレ*／皆不可不知シ
 カレトモ今日ノ假字ヲ用ル人ハ古ノ⁽⁸³⁾アルニ從フコ
 トナ／レハ開發收閉等ヲ辨スルニ不及ナリ、且此開
 發等ノコトハ、イトく／微々タルコトニテ、彼土
 ノ人ダニ、ツマビラカニワカツコトアタハズコレラ
 理ヲ／推テ立タル〇(名)目也、清濁ハシラスンハ*
 アルベカラストベハ瀧ノコトヲ／多藝トカクハタ
 ギトニコリテ唱フル言葉ナレバ也〔藝ハ濁音〕*ニス
 ベテ此例ヲ／以カナヲハカク也 移ハヤ行ノ格ノ字ナ
 レハヤトヨム。コレラ字母ヲ知ラサル／ベカラス*
 韻頭ヲシラネ。ハ諸ノ字ヲサゲ*⁽⁸⁴⁾コリ出シガタシ 四
 声ハ萬事ノコト／バニナシ*ト云フ*⁽⁸⁵⁾ナシ。古
 事記ノ自注ナドニ或平或土*⁽⁸⁶⁾ナトノコトワリアル

ヲ／モオモヘタレカ開合ノミト*云ハン

*〔静〕コトハラ *〔静〕「ク」を消して「リ」とする *〔静〕
 「ズンバ」として「ン」を朱で消す *〔静〕云 *〔静〕「純」を
 消して「馴」とする *〔静〕「ストオモヒ昔人ガ」を消し頭注で「ネ
 ハ」を補入 *〔静〕「サテ」を消し頭注で「マタ」を補入 *〔静〕ニモ
 マレ↓〔静〕ニモアレ *〔静〕マレ↓〔静〕ニモアレ *〔静〕「シラ
 スンハ」の「ン」を朱で消す *〔静〕「藝ハ濁音」↓〔静〕「藝ハ濁音
 也、後世ハタキヤスミテ多ク云ナリ」 *〔静〕「シラサルベカラス↓〔静〕
 知ラザレハ、コノ理シレカタカルヘシ、 *〔静〕グ *〔静〕ナシ↓〔静〕
 コノ理ナシ *〔静〕フ *〔静〕上 *〔静〕云ハム、

⑨ 況若阿和也止莫加焉

阿和也ノ三行彼ニナシトハ。イカ。儼然トシテ其定
 格アルヤ。若／此三行ヲ疑ハマナノ二行ヲモウタ
 カフヘシ 韻鏡ニテ喉音影母喻ノ母一二三等開ナレハ
 阿行也 合ナレハ和行也 影母喻母第四等開合ニ／
 論ナク也行ナリ〔也行ノ格大田氏始テ發明セリ実
 ニ千古一人其功禹ノ下ニ出ストイフベシイソシムベ
 シく*〕

*〔静〕イソシムベシく↓可貴、

⑩ 果如其說乎 止 言之

以為衣惠於遠等ノ唱呼ノ上ノゲ*ヂメ古ハ明カニアリ
シコトナランガ*ノ中古以來アダシ国ノ文トモ入キ
タリシヨリイツトナクツネノ言葉ニモノ字音多クナ
リテ甚シキニ至リテハ言葉ト字音トノワカチタニワ
カラノ又コトモアレコレ*出来ニタリ 又音便ノクツ
レ延喜ノ比ヨリヤ、ミユル也ノカ、ルコトヨリ純粹
ノ音ヲケガシテトナヘノワカラヌモ有ヘシ 又此二ノ
種ニアヤマラレテ師曠ノ耳ヲ失ヒ口ニハ辨別ノ*オ
ノツカラアリノテモ人皆キ、ワカラヌ*モアルヘシ
又字音ナド、マカヘテ言葉ノ本義ヲトリチカヘカ
ルク伊ト呼ヘキヲオモクキト呼フナドノヤウノコト
ヨリ混シタルモアルヘシ コノコトハ攻*證ヲ引ヘ
キコトニアラスノシテ空論ニワタルユエニ【ナ】ヒ
サシテ各々ノ自得ヲ待也 トマレカクマレノ今ノ世ニ
ナリテハキ、ワカヌニモセヨ混同シテ心得トキハ古
書モノヨメス■用*モタリヌ也 イカニトイフニタト
ヘハオバトカケハ祖母也 ラバノトカケバ伯叔母也
コノ類アマタ大ク*アリ 扇ヲアフギト云ハアフグノ
モノユエニアフキト云也 (スベテ二等ノカナハ休^{休カ}
也 三等ハ用也)*¹⁰ソレ*¹¹ラフキ^{ラフク}キ^キラフクトカキテ
ハノ(9ウ)ワカラヌ也 口ニテ^イカナヘテモ*¹²、三言
ツハケテイヘハ*¹³ラフクニテモキコユベノケレトモ

一言ツ、イハ、ヲフクニテハアフクコトトハサラニ
キコエヌ也ノアフクナレハ一言ツ、ニテモワカル也
又アフクハ物ヲアフクコト也ノオフク(左傍「過久」ハ
郡名(備前)ナリ カヤウニコトワリ明ニテモコレヲ
疑フヤノ問曰 口ニトナフルニハカハルコトナケレト
モ物ニカクトキワカツナルベシト 荅曰ノ人タレカ簡
ヲ欲セサラン殊ニ古ハ質也ソレニワザノナニユエ
ニコレノヲカキワケンヤ 僕士*ニハ一義一物ニモ大
方ハソレノ二字モアレハサルノコトモアルベケレ
トモ御国ハカナレハカキタル斗ニテツクスコトモ
出来ノネハ豈*¹⁵一ツニツノミカキワクヘキコトアラ
ンヤイカニモ儼乎トシテノ称呼コトナルユエニ以為
等ノ差別アリシ也 (カキタル斗ニテワカラヌトハタ
トヘハ柿垣並ニカキ炭■ノ墨並ニスミノ類也 前後ノ
語勢ヲ以テシルニアラサレバワカタレヌ也ノ
漢籍ニモコノ類コ、ラ*アル(左傍「多大」*¹⁶也)

*¹⁷(靜)ケ¹⁸(靜)ナランヲ、*¹⁹(靜)「アレコレ」の「ア」を
消して「カ」と直す *²⁰(靜)「ノ」なし(二字分空白) *²¹(靜)
ワカヌ *²²(靜)攷 *²³(靜)日用 *²⁴(靜)「タリヌ」の「リ」を
消して「ラ」と直す *²⁵(靜)「大ク」なし *²⁶(靜)割書なし *²⁷
ソレ↓(靜)コレ *²⁸(靜)トナヘテモ *²⁹(靜)「イハハ」の「ハ」
を消して「ハ」と直す *³⁰僕士↓(靜)漢士 *³¹(靜)「豈」を消

して頭注で「イカテ」を補入 *5 コハラ↓(静) オホク *11 (静)
左傍「多大」なし

⑪ 或曰為者止牽強已

前ニモ云コトク五十音図ハ御国ノ固有ニアラスコレヲ
以テ御国ノ言ノ葉* 難スルハ管仲ノ屈弓ヲ難スルヨ
リモ甚シ

ノハハタ兩行ノ半濁ナノナレトモ一株トナリテ図
ニ出テカキクケコノ半濁ハ別ニナシ

(10オ)

*スヘテ

此図アカサ等ノ次第ハ梵ノ文ノマヽ也 字記ナト
ヲミテシルベシソレコレヲ釈文ニトヘ*

* (静) 言葉ヲ *3 (静) 長線、空白なし *3 梵文ノマヽニトヘ
↓ (静) 梵文ノマヽナレハ、○ (字記ナトヲミテシルベシ) (挿入位置
に「コヽヘ小字ニカクヘシ) 【君】ソレコレヲ釋迦文ニトヘ、(傍線
朱筆)

⑫ 吾迹其所録*止篇末

此説ナドイヨク御国ノ書コレヲ* ヒロクミサルヨリ
ノヒカ心得也 開合ノ説* /ヨリトコロ此一事ナラン
ヤ コノ二天子ノ御名ノ外ニ以為等ノカキワケノ甚分
明也 コヽモ果其説ノコトク古質ニシテ同名トイハ、
追書スルモノノ亦同名ニ同字ヲカクヘシ 又弘億並同
音ト心得テカナカキニテイツレニイツノレヲカキテ
モヨシトオモヘルカシカラハ兄ニ弘ト【イ】モカキ
弟ニ億トモカクベキノニサハカヽスシテ大小ノ義ヨ
クカナヘルハイカヽコレハタタマヽヲリアヒノタ
ルコト* ニテ実ハ通用スヘキトイハンカ 古事記ニ億
ヲ意富ニ作ライノカヽセン コレヲモ偶然ト云フヤ
丹波小子ナドノコトハカケマクモカシコキノ御身ヲ
モタセタマヒテ都ヲハナレサスラヒノ御旅アリキナ
レハノ一時ノトナヘニ御兄弟ヲトモニカク称シ奉ル
モ何ノサマタゲアラン (今旅中ニテ駕籠ノ(10ウ)カ
クモノヽタガヒニ因幡ハイカヽシタ下總ハ【イカヽ】
イカヽシナド○(云コレソノ国ノ名ヲ以テソノ人ヲ云
フヲモオモヘ) サレハコ【レ】コトヲ以テ何ノ證ト
セン

* (静) 「録」を消して「蘇」と直す *2 コレヲ↓(静) ヲ *3 説
↓ (静) 説ノ *4 コト↓(静) ノ *5 (静) 「スヘキト」の「キ」を
消して「シ」と直す *6 (静) 「ニ」に「ト」を上書き *7 作ヲ↓(静)

カケルヲ * (静) 割書、(今旅中ニテ、俗ニ雲助ト云モノナトノ詞
ニ、因幡ハイカマシタ、下總ハイカバシタナド云〇(トカ)、コレハ
ソノ国名ヲ以テソノ人ヲ云フナリケリ) (傍線朱筆)

此四十四音論の作ぬしハ^モろこしふみにいみしくこ
／ろを入^チこゝら物し楽人のいまたしきふしく／
をものこるくまなくうまくかうかへあきらめ【て】
／まなひの臆^イいひ出れハ物よくも心得ヌ^人人タチ
の常ノニ此ぬしの漢まなひの事をいそしミたふとひ
其^コ／こゝるならひに御国の事もしかありなんや
【と】など／ヤウニおもひ入ぬへし——* 保孝
こゝらのおほ^レ／むたからをあやまらんコトラヲソ
レ又作ヌシノアツラ／レシ^ココトモアレハイトイタ
クアヤまれるを正したるに／なん

文政五年秋八月 岡本保孝稿

* (静)「臆」の後「いとたかし、されハかゝるひかこともうへく
しくいひ出れハ」 * 以下、東大本が片仮名で書くところも静嘉堂
本は平仮名 * たふとみ其^コ(静)たふとむ * (静)長線なし(一
字分空白) * アツラレシ^コ(静)あつらへられし

(一一六) * 弘化二乙巳春正月会二日

即日書写畢 (花押)

* (静) この奥書なし

付記

文献の翻刻を許可して下さった東京大学文学部国語研究
室に、また二度にわたる原本調査と、その結果の公表をお
許し下さった静嘉堂文庫に、厚く御礼申し上げます。

(たなか そうた 大学院人文社会系研究科 修士課程一年)